繪本甲越軍記

初編

十一

2258
11

遠へ13
2258
11

池清

徳川十五代記　編

開明小説　鳥追松実録　十五　大尾

弥説　夜嵐実記　全

松村春輔著
近世　櫻田実録　全

書物繪入　貸本所

春雨文庫　編　敵討　無野權三代記　全部十五冊

近世記聞　編　明治太平記　全

参考肥長　鹿児嶋士傳　編

此書たる、出軍士卒の日記或ハ戦地より歸京せし探偵人等の説話より因り西國証討の如来を詳細せる第一の實録なり

近世小倉青木實記　全部　近日出来

這、徳川家の旗下青木弥太郎小倉藩長吉唱妓張ひ寺春情の事寄暴借強談の悪事青木の奥方艱難心苦を記し實録の反紙綴りたれハ近世の珍書なり

東京牛込細工町
誠光堂　池田屋清吉謹白

繪本甲越軍記卷之十一

目録

戸石合戦之事　并　村上義清後治之事
甲州勢攻戸石城図
小為五郎左衛門戦亡図
甘利備前守戦死図
山本勘補軍略之事　并　村上勢敗北之事
戸石合戦武田家軍士拒村上勢図

其二

245

其三

其四

山本勘補軍器敗村上勢國

石合戦之事　幷　村上義清後佐之事

斯く天文十五年に始り、時代古の巣本敗しを、漸く茶年振り復義滅亡の後、信州冬の大將芦田下野守、相木市郎義滿、依田平沢右衛二の武田方せんとなりぬ。されば上の村上義清、攻亡屋敷、しと、絵計を、されるる。夏本作刑小縣郡、石合の村上義清、小笠原大膳長時と、相持の城、村上方、長尾景虎、問苗弥次郎、千三百人、小笠原方、長沢右馬助、義清方、夫を大將として、其勢、夫武田の外、北條、敵、大こうけ、ふ、ふ、ふ

甲乙

りてこれを伝ふ。あるいは武田家に服せんか本若ぶ笠原に同意せん
者あれば戸石城後援を為すもわんうを待ぶ。本若ぶ笠原の押へ
として左馬助伝繁、宍山城を守る伝良小山田左衛尉ぶ備後守正
盛、金森若狭守城に下源治郎向く塩尻城に押へら武板垣信濃守
と大将として原美濃守昌胤等上野
れある。上杉憲政古文憲昌れ多の信長本若ぶ笠原に同意せざるべ
しうべ自然加勢を乞来もわんうこの用心乃為るう其外所々を押
えられる信濃の武隊信ぶ四千百七拾人甲斐を出馬せられ二月十
四日戸石の城に押よせ攻ひぶ栗原左衛尉の海野普田
下野守根本市良兵衛川上入道弟伝路平沢を先鋒として千人百人を以て
城と一番攻仕出され若原ぶ二番ぶ武田二番ぶ

攻

城を攻とり。抑戸石の城と申ぶ城の遠き南弟向へ出ぶ城と一元城
城と山城ぶして後の方ぶ山弟城ぶ城ぶ戸田の郷ぶ城ぶ戸田の郷ぶ城ぶ
ぶ戸田の郷ぶ城ぶ戸田の郷

敵

郎左衛門先陣として縦風の奔流を渡り、西の方へと押寄せ、敵小
史料の道を付添れる間、老若追々に馳て、村上が勢一番に馳寄る山田
に向ひ、ひとゝ戦る。其後、その言葉を聞うらむ。早押を教、縦横の者共
と為さんが如く、遠く人馬の勢を分て、馳たる石垣を新しく築へ、
村上が後詰を待ん。敵したる小田原の方へ押へを考へ押へ来たる
内藤を屠れ、ふと甘利備前守と小山田備中守、両人平郎父子、
其勢中に村上が人数を対する。時を九分一の勢なり。一時も早く
思ひ、ひとゝも小敵と見て、恐れざる武田の軍
勢、千騎を去来、倍ふ八九所。右の方へ戸石の城を
うたる。西の方一面ふ柵を御手、強弩の巣を押
兼、敵勢多ゝと見て、一進の強城地へ流れ、
敵

甲記

もとゝ。此時、信玄の御本陣を、武田百騎減と去来、
村上が押の海を渡る。足八九所、許
時、信玄安堵し、信玄の御本陣の勢、後を去せ、陣の後詰
諸角を以て七十人を分て、西の方へ備へ、
後詰の村上が後詰の大軍、戸石の堅城へ
城将、右の方へ逃ふ。笠原の長沢、村上の業師、武田二百人、史料
よりの後詰と待く、案内、武田の紋付、切入と雲間
城を切わたり、信玄の仏師、漢の押付を見せ、
毫末も、まだ、旗本に知て、
なれの申しひなれば、中く、強く、張れ、
村上方、十陣を備へ、五陣を分て、紫岩の石垣、

須田大炊介満国を討たせ、牧備前守玄蕃允、其後の二方に村上方陣を張る。
先陣の大備を以て、総二番三番初陣の者共、其勢時利と見て、
続いて勢を加へ、敵の軍を抑へ、
信の前紙を送り、再び更科へ帰陣せ度思ひ切る備なり。
一同に鯨波を発し、攻かゝる。其利備前守真先に備へ、
鉄砲を打出し、其間煙霧の如くなれども村上方備を引き連れ、推寄る其利が
一陣に働て入乗出る。馬場信春五頭に、豆腐に成る程に
五郎左衛門と共に頭の勢を分く。其利少々手負ひ早発と
流れの甲州勢。これぞ九死一生の残ひろい。
今日の合戦に打負て、甲斐へ帰陣せ度思ひ切て、
引き退く。

駆つゞき、其も今日の戦ひに、信濃の前紙を推る様に、
場所とせ、至ひに義勢と勝と合戦。
ざうりの中に小鳥の毛つゝ黒漆の陣笠に
あく様の丸れ紋を付くに、惣せ間絵
の馬印、切られ出雲守、
十万を佩き、馬伏せ陣に、
方々十信の大軍に、
ら度、
田ざうり折り、三月の中旬、
耳利小田原を攻て、

甲越
250

大軍敵くしと雖も真武隼くこれを翻せ走る
むらしの情を博ふことを早くし陣を捨て戦ひを斬くせんれ我やくに
せ殿軍と絶まで小原云して其利の勢の中へ駆入て七人目ト
絵の棚代の八方より眼を射る
敗を其利小山田法軍の孔をとる
まるの原の旗本の旗使として来て横田備中守甚之丞平助と云ふ
ちよとをく味方の劉備武見らして兵ろしぶ兵平助と今年廿三歳
原兵衛尉虎胤が陣の備中守甚之丞平助と云ふ
初陣と高名を新てあり今年十六歳
壮年父中はどく軍状をく指ちが
歌の中武押分くれ

横

譯

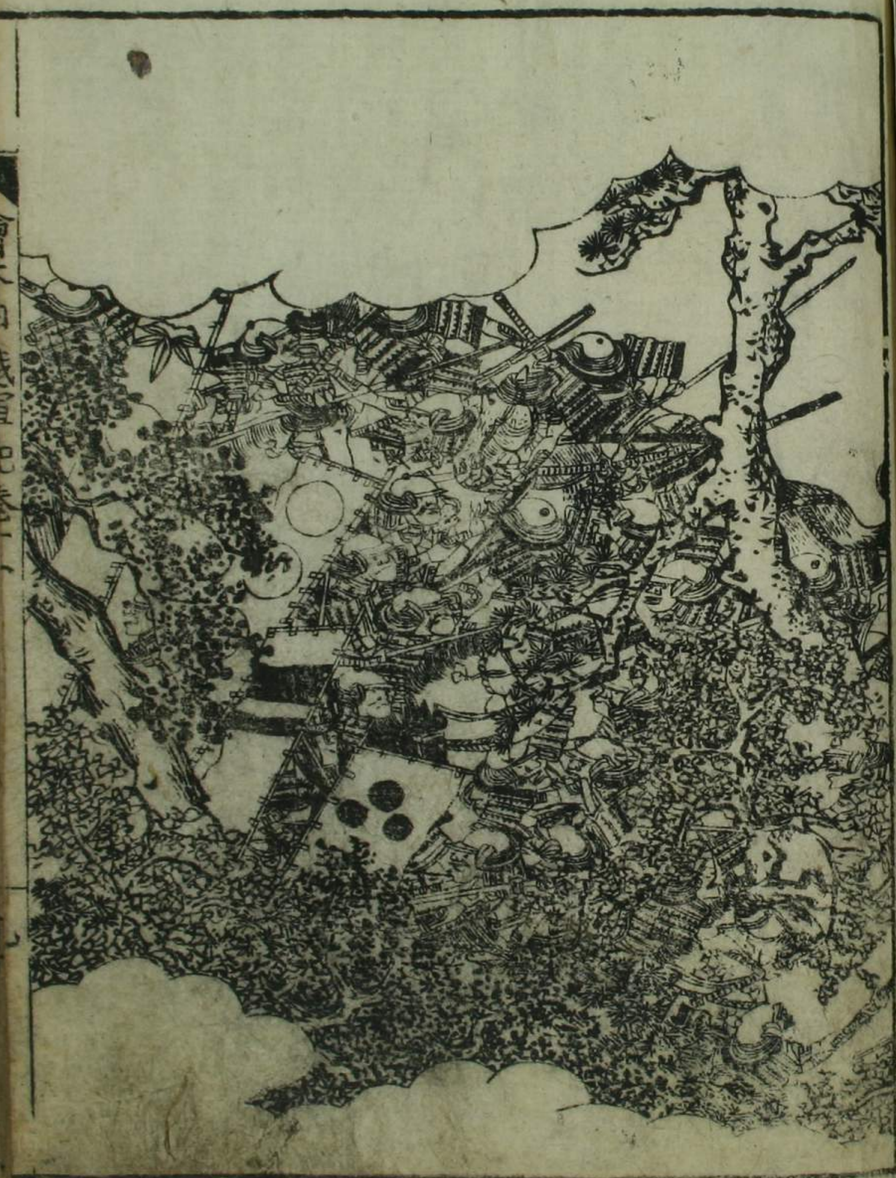
ふと声をかけ兵十郎打負くまた下にはかるれ我く父の御旗本の
旗使ふりかざし旗使する者ど同じ戦をみし同様討死せ
見て使く言ふとべきや旗使を戦功見なれ後ろ森忍をべうぞと制しられぞ
兵十郎父は対ひ殿父の指揮ふ旗使も聞きよ所事上ふく作
味方ふ一陣を破ふれ兵十郎大将軍の旗本へ味方前を
ふるべと時ふ大将軍紛まのひふ
を守ふ安堅として形る時
旗使の役分成動として森忍の戦をふ
腹切くとりけ
頭も推ふと云捨絵馬
浅瀬を渡ふとは事かわと

横

譯

同紙ほどぶ高の長槍を人の撓と仕り、信濃猛猪と成して、地獄鬼
神の如く打ち廻ふ。近く寄て、実方実へ、る勇力撫剣
物凄もせず、突合ひ、撫間が鋼鎗を小高き石の二丈脇を傷れ、し、槍を座
伸と、ひ、て、ふ、て、ふ、て、ふ

甲越 250



甲越

備中ものも大小多底を彼ら来武三間計物具茶に浸るゞ〻。城場ふ踏行人
ためし時戸石の城中ゟ村上の後詰とんゞ中ゟ敵ゟ後詰方に後詰方に後詰。
味中ゟ敵ゟ奈ゟ。奈ゟを追ゞ。時ゞ後詰中へ切ゞ〻。ゞゞ三百人深つ
ゞゞと押用ゞ。ゞゞ上ゞゞ狭丸を時ゞ攻ゞ。城ゞ攻ゞ。ゞゞ原原
渡ゞ射給ゞ。蓮田川上時ゞ入ゞ。ゞゞ時の中へ寒ゞふ侍人ゞ。伝列先後の人ゞ。
村上ゞ後詰の時ゞを後ゞ。ゞゞ時ゞ乗ゞ奪ゞ。城ゞの時ゞふ付ゞ。ゞゞ。
崩ゞ。ゞゞ。ゞゞ。ゞ

武田晴信方右衛門尉を見付ひ出し上杉方を引くに村上が勢を以て
て今義清を一戰の勝負と成る所に討死を遂る
那しを敗北加藤を辭し馬ふまんとして行くに山中勘助御前に對ひ申す
我君村上が勢はきとあ其利横関が戰乱の上にて添れ數多の一騎今の
間なり是程に崩れたる味方なれども一戰多の味方の勝利なるべ
き事わうぜの作りん晴信宣ひしるるに奥方の孔明孫武の事
新しき軍法拵る事は思ひもよらぬ形成作法をこれ村上が旗
なる衆人時雄を失し戰を戸石の戰場に迫の外地事官意なるべ勘助
頭を傾けるに申す事あるべ御事あるべ左様に經験
ある地覚えり老武を捨て泉と金しい始終の勝利を肝あり申べ
古今良將の名を失なわ名を成る戰なるべ敵なる彼

長の作晴信宣ひしるるに申す勘助日今敵あの方に敵の旗
なり申す事流れの御おわば勢ひあるべ備を勝じ申べ敵の馬
は頭を南に向せ作るべ味方敵の横を入れ便あるべ敵を南頭
に向せるべ忽味方の勝利なる事疑ひなく長理を
後詰しも那ふ軍に成べ味方の勢ばかり何ともなき極る況や
敵の備弘自中小南へ向せん事思ひもよらぬ勘助重く申べ後陣の味方
ふ所あり諸角豊後守七十人を系ぎ武田の兵武士六十人の
勢を集よ敵を作るべ晴信の間に一異計仕敵と南頭に備させ
方備をぐ直して作るべ味方の勝其時ふ敵合一と突入
は来敵を崩く間に突破る勝利斜なるべ遂に一方異者
を作南を後る武石也忽ち海の勢と動助に伝をべ申あるべ勘助忽

馬を打ち出し九十八人を引連れ何とも物見小幡の用意して次の日方々を
戸石村の後と申して道不村上郡の方へ押廻り弓鉄砲村上義
清押への人々も其利扶団が戦死の上不ぬ山間備中守が森を抜て剃ひ
雑談するふりを其利ぐるみ不弟ふそ居けり其金丹後守の用ふ殘を
村雲ぐ小さふ切と二度まで突崩を村上方の勝ぐ敗ふ半の刻の下り
ふ拾こ人ひて東へ向ひ引き退ぐ武田勢と称ふ村上方ぐ対ふ
勢八人ふ加ふ武田勢と称ふ対ふ湖水の渡ぐ押ぐ五押
ふふ所ふ南の方ふ当て戸石野山のよふ旗の手調ふ武田勢の往
よふ見ふ行ぐ戸石村の後を廻て味方の後城勢ぐ武田勢の往
先動助ふ行候小旗の計暮ぐ号し僅ふ百騎ふ武田勢を攻ぐ。
敵の見代ふ陣所のあふて勝ふ軍勢の押ぐ

村上ぐ若干ふ引ぐ軍勢別ふ一手の新兵を以ぐ味方
の後へ向ぐ引ぐ武田ぐ旗中の後を取切て
取ふ所ふ見ふ行ぐ後を取切ぐ行ふ村上
ふ多ふ南の方と陣ぐ東の方へ向ひて一の旗を繰ぐ勢一目ふ
を勝作御旗中の勢ふ是を見ふ
頭ふ進ぐ若南頭ふ
也至ふ新を見合ぐ戦ぐ
真里ふ黒ぐ引ぐ附動助戸石の郷の後ふ斜ふ陣ふ
撫殺ふ今ふ知ふ西作を御旗中に拍ふ
若ふ根岡西助教ふ石民新ふ捕春日弾正ふ

旗

旗

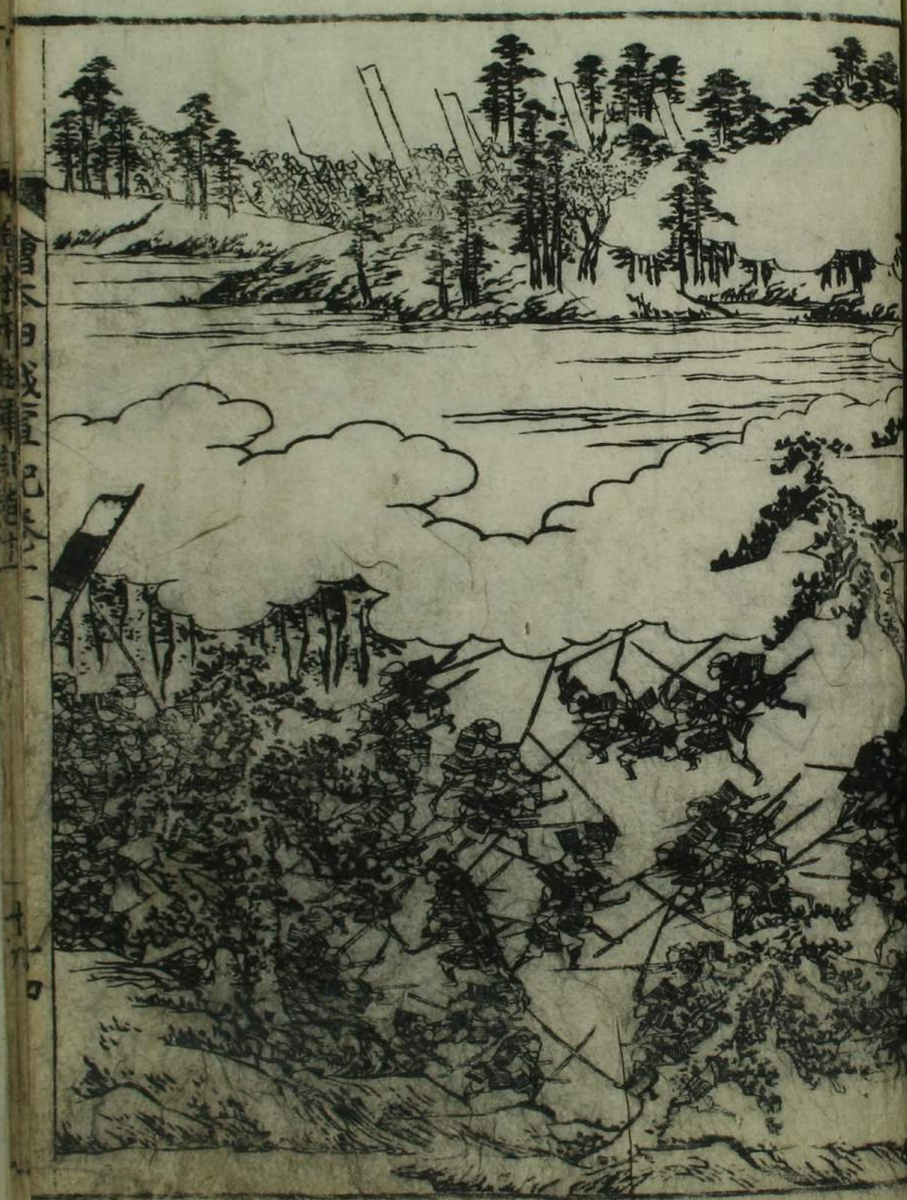
敵

堪

返

甲越
257

甲越
258



甲越
259

甲武
260

して戦を能先手に成張る人々能なるの雲と成るが如く一用ふ場所に成ぬ
為小村上勢援合を討まく成敗を遂り迫着成る
未だ勝負を切結ぶ乗にせよせいへ加く社あるを我一番と進まれ村上勢
押へ者ども援合戦うれ一度引を備とえ去へ幸あるを民真平地ふ
洪水迫くぶけて迫ぶ討死を戸ども数ふ深田ふ迫ふ
上杉ふ陣ふ馬を押倒れ味方の馬ふ踏殺され坂ふ道三十里許ふ
一敗ふ成く迫ふる山中ふ動其後戸石城の方へ戸石の軍勢の示
出したるを加る援ひるを戸田川上勝沼ふ力を加へ迫迫んとする城云城ロ
ふ上へ戦ふ不と動助逸数ふ張ふ加森猿ひるに力を加へ下後をする海云
と戦ふ猿を城中へ迫迫其後ふ陣ふ之還り味方勝ふ本へ村上方ふ勢と
迫付る戦早ふ上へ人ふ味方と制し海と為し

又敵

手強く上ふ人ふ是思ふ味方優勢ふ内ふ勝を
ふ敵数の勇武ふを強く勝ふ強く迫ふ
味方ふ人ふ迫敗ふ人ふ戦ふ
合戦味方十台の負軍ふして若動助形ふ
迫ふ九十人の勇ふ戦を怒し備を南頭ふ
芝居戦場ふ為ふ手ふ武代ふ国の合戦ふ日味方の士ふ将其利援田ふ
戦亡七百戦信ふ人ふ或書ふ晴幸軍配ふ考ふ之の舟を
南ふ人ふ味方ふ支ふ人ふ兵ふ者流の人
是ふ大星の操ふ強ふ軍に強ふ
ふ戦を以て其斗柄星の剣先ふ向へ
招ふ人ふ味方ふ接ふ所意味深ふ

敵

方
方
又
雖し

かゝ所より彼軍に向ひ[illegible]孫武子が十三篇其外古今漢
土の兵書にいふ所の是半の様方にふ強く見を変じて勝ことが半を云は
ば天官時日と強しかを巫祝の流にして是ご取小兵に
身命を剣戟のうちにふ勝敗の下に関係の安危を決する戦場に於く何で
是を扇の事を以く方事の命を打ほをもつ孔明が南蛮をたんとして易
城を攻ると其右と得るに[illegible]て南蛮をたんといひ[illegible]れて易ふ拓て人公武
一戦にして南蛮を攻させんと思ふ事あり何で腐儒拓眉と[illegible]て人命を
是ふ[illegible]れんや脇ふ此ごび敵城して南頭ふ立ちて村上方を[illegible]ると
事は勝負を利七ツあり[illegible]一ふ数今西ふ[illegible]して東に向ひ[illegible]る其勢ひ
如れ早ふ流るゝ[illegible]ごく[illegible]右と高ふ[illegible]ると轉を[illegible]拓る武南の方へ押
[illegible]ふる時ふ[illegible]ふ其勢ひ弱ふ事[illegible]して[illegible]向ふ[illegible]二ふ南れ山上

よりと小旗ばんせ敵の後と[illegible]て[illegible]と見とる時ふ大将ふ[illegible]事に[illegible]
城取敵ふ[illegible]ば[illegible]一大事なりせ見ざる者あんや拓ら[illegible]武軍乃ふ
分難して半は[illegible]ふ[illegible]ふ後ふ[illegible]敵の心を二つふ[illegible]ふ[illegible]二ふ
たゝく[illegible]兵の計畧ふて拔意後ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]武
用方ふ後を[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]備と[illegible]
で[illegible]ば[illegible]ば勢ふ[illegible]ふ進む事[illegible]歩方備と換ば[illegible]
敵として進[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
の一身敵を面ふ中ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
軍ふして南頭ふ向ひ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

甲越
263

十年に成る。敵南小向ひるば味方必勝の利なりと熱田社の神を
祈りて敵の南小向に来れば中日命ふ所よ人軍勝て南小向へ。
駿河波津の猪利に付るうせ勇人勢くせ立ち初ふ十倍をべ一勢を得
なる味方をかく敵軍へ横槍を入るば何ぞ猪利なるうんや第六日人
備を堅くして居るとも横槍を入らるべ付を駆おとるものなり。是ふ依
て軍衆多人。正兵奇兵とふ事あり。正兵とふ面ふを舞をとると号さ
正兵とふ横合よりかゝを奇兵とふ。ゆえて今敵の後をして南小向
せるば敵ふ一ぱ求て横槍を入るを為ふ敵ふ軍猪さん。
第七日人敵兵を日小向しひ。是軍衆第二雑徒なるうと見ふ
許藤日小映して輝くと自己の細戦の光小眼に奪ふれずやくして戦ひ
ふ。今日午刻の下にして日光和ふ小向ふ村上方に方ふ向い

己

己

己が伏兵豆小服に遠ふ。一方の人を軍中に忍ばせなり。又猪
日小向人合戦をして勝利を得ふ。
向を分て来れば泥沼ふ。其ふ七日小向人戦
利ふ。是を宜ふ。日本紀を按ずに神武天皇日向渡欲武船
葦小合尊の御子なり。此時ふ荒海の御ふして九州の地小向
東に国あり。ふ来れば知ふ。日向国高千穂の宮小至り神武尊と
ある時御兄五瀬命稲飯命。三毛入此命ふ申ふ東の方小向
進し。私出して東小赴く。国を統治
国を統治。天皇御年一百七十九歳。
西の日向を辛人。縁を解ふ。是ふ安産御
高倉の天皇ふ。四年成午寅二月十日丁未の日小

今の摂津国浪速浦ハ御祝ヘさせ給ひし門を通して、その国に青雲ハ向
高津ハ今の数方ハ光をあらはさせ給ひ、人和国ハ入んせ給ひ、人和ハ
鵜邑ハ長髓彦と云者あり。天空ハ大和へ入せ給ひ、伊駄越ハ今の国
加ってへ入せ給ふを待まうけ、茅根ハ散くして射ケ原ハ空軍ハ敗れ
射ケ原ハ空ハ近き中ハ敗れ、附天空ハ五瀬命ハ真先ハ進て、孔舎
衛坂熊襲ハ登り、ハ血を流夫ハ、くハ忍ケの肱ハ、ハ傷く空軍進
事能さるけるこ、ハ空ハ孔ハ、くハ空沖衿ハ神集あり、稲今我ハ
しく日神乃子孫として日ハ向ひて虜ハ討んとするハ天道ハ逆ハ
敵軍利あらざれば南の方ハ向ひて日を背中に負ひて軍と云へ。
西ハ利あるべしと思ひ南ハ方ハ向ひ、道ハ五瀬命矢疵ハ、くして
終ハ崩じ給ひ是ハ紀伊国名草郡竈山ハ葬ハ大和国

宇陀郡ハ出ハ、ハ長髓彦を迎撃し給ひ、大和国畝傍山の西南橿
原ハ地ハ都を作り給ひ、ハ畝傍橿原宮と云ハ、人ハ、ハ社ハ
天孫の御身ハ敵ハ、ハ日ハ向ひ、ハ、ハ射ハ、ハ日と背負ハ日ハ血
ぬるぬるして揚ハんと宣ハ、ハ後の軍ハ、ハ強ハ恐ハ清盛の流の
御計を攻ハ、て日ハ、ハ向ひて弓と云ハんハ、ハ、ハ、ハ
なる事あり、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ軍
ハ、ハ今の賊も助ケ給ひて日ハ向せ給ハ、て揚と云ハ、ハ、ハ
白ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、